

大学での女性教員 の婚姻形式の多様性

薛穎

目次

1. 問題提起
2. 研究方法
 - 2.1 半構造化インタビュー
 - 2.2 インタビューの質問
3. インタビュー
 - 3.1 インタビュー研究ご協力をお願い
 - 3.2 インタビューの説明
 - 3.3 インタビューの考察
 - 3.3-1 大学教師になる条件は厳しくなることは教員の晩婚と非婚の一つの原因になる。
 - 3.3-2 婚姻形式の多様化は女性の社会進出の要求だ。
 - 3.3-3 任期付きの制度は女性の結婚や育児の計画を妨げる。
4. 結論
5. 参考リスト

大学での女性教員の婚姻形式の多様性

1. 問題提起

最近、同性愛についてのニュースなどはよく耳にする。世界におけるいくつかの地域で同性結婚が認められていることも人々に知られている。現在、経済の高度成長によって、異文化のぶつかることやお互いに勉強したり、受けたりすることは徐々に普通になった。従って、この自由な世界で、様々な価値観や考え方、やり方などが多くの人に受け入れられている。それに伴って、現在の女性の結婚観も急激に変わっている。井上輝子(2011)はお互いに親密な感情をもった人同士が、一緒に暮らし、子どもを産み育てたり、一方が病気をしたり失意に陥っている時に、ケアしたり、助け合ったりする関係が結婚である。結婚は、個人にとって、性的欲望の満足や、精神的安定、経済的安定などをもたらすとともに、社会にとっても、性的欲望のコントロール、労働力の再生産、次世帯の育成、社会化機能などを果たすため、結婚の歴史は人類の歴史とともに古くからあった。とはいえ、結婚の形ややり方は、歴史によって、社会によって変化してきたと主張している。

80年代および90年代、女性にとって、20歳頃から結婚することは普通として正常なことだと思われる。30歳に過ぎたら、「病気または悪い癖があるかなあ」というマイナスイメージが付けられる恐れがある。そのため、20代の女性の結婚は当然なことだと認められている。しかし、最近、「未婚化」ということは徐々に注意されるようになった。総務省統計局の「国勢調査報告」によると、1970-2005年、女性の25-29歳の未婚率は上昇のスピードが最も速い。70年代の20%から2005年の60%になった。なお、晩婚化、非婚化、DINKS、仕事のため夫婦二人は別のところに働いている形、披露宴が行ったけど結婚届を取っていない婚姻等々、多くの結婚の形が出てきた。

以前、筆者にとって、非婚やDINKSなどは小説や映画の中の話であった。筆者の身の回りにほぼ見たことはなかった。大学での女性教員はだいたい普通の女性と同じで、結婚のことは当たり前だと思われる。しかし、日本に留学してから、大学で女性教員が少ないということに気づいたと同時に、この少ない人数の中で晩婚、非婚、披露宴が行ったが結婚届を取っていない人はよく見えることにややびっくりした。これは本当に不思議なことだと思う。高学歴の人は様々な価値観などを受け入れやすいから、時代遅れの観念を突破しやすいということは理由として認められているが、この現象を引き起こした原因はわずかな個人的な価値観や結婚観の変化だろうか。実は、将来、筆者は大学教員になる可能性がある。しかし、晩婚などは全然考えたことはない。現状から見れば、筆者自身も仕事などのため晩婚、または結婚してから彼氏と別のところに働く人になる恐れがある。もしかしたら、子どもを絶対に産みたい筆者でも、ある日DINKSのことを考える可能性もある。

筆者の目の前で、女性教員たちは現実によって様々な婚姻形式を選んだ。30歳以降結婚することは普通になり、様々な婚姻形式が多くの人に受けられるようになった。このような現象を引き起こしたのは、決して個人的な結婚観や価値観の変化ということばかりでなく、社会的な原因があると思われる。では、どのような社会問題が女性教員の婚姻形式の多様化を引き起こすのだろうか。本稿を通して、様々な婚姻形式を選んだ大学の女性教員をインタビューして、大学女教員の多様化の婚姻形式を引き起こす社会の問題を明らかにする。

2. 研究方法

2.1 半構造化インタビュー

本稿では、女性の多様化の婚姻形式を引き起こす社会問題を明らかにするために、インタビューの質的研究という研究方法を選んだ。インタビューは、直接観察だけでは捉えにくい事柄に関するデータを、当事者との会話を通じて得る方法である。質的研究では、直接観察法だけでは得られないデータが必要なのが通常であり、特に当事者の感じることや考えていること、当事者のものの見方、感じ方、考え方を理解することが重要になる。なぜこの方法を選んだかという点、婚姻形式の多様化の原因は社会的な根源があり、人によって表面的な理由は多分違うが、もっと深い原因を探りたいからである。本論文の目的は大量のデータから婚姻形式の多様化の普遍性を説明することではなく、一つ一つのモデルと話しながら当事者の思い方などを直接に感じ、社会的な影響を結び、その結婚観、価値観などを分析することによって、事柄に関する必要なデータを得ることだと思う。そのため、質的研究はもっとも相応しい研究方法だと思われる。

2. インタビューの質問

- ① 結婚についてどう考えるか。(婚姻の意味、自分の結婚観)
- ② DINKSや未婚などの様々な婚姻形式について、どう思うか。(以前と現在の考え方の違い)
- ③ 恋愛のとき、あるいは結婚の前に、結婚についてどう考えたか。/婚姻生活のデザインや予測。
- ④ 結婚についてどんな問題が出るのか。(仕事、経済問題、家族の反対、意にかなう人はいないなど)
- ⑤ 今の生活(または婚姻生活)でやむをえないことがあるか、それは何か。
- ⑥ こうい問題はあなた一人だけの問題か。自分の身の回りに同じ事件があるのか。
- ⑦ この問題に対してどう考えるか。どんな社会的な問題があるのか？
- ⑧ 女性教員の婚姻形式の多様化についてどう思うのか。何か意味深いことや問題があるのか。

3. インタビュー

3.1 インタビュー研究ご協力をお願い

インタビュー研究ご協力をお願い

拝啓

私は現在秋田大学教育文化学部において市嶋先生の指導のもと、大学での女性教員の婚姻形式の多様性について調査しております。大学での女性教員の婚姻形式の多様化の原因を明らかにするために、大学での女性教員を研究対象としてインタビューを実施させて頂きたいと思っております。そこでぜひ一度、婚姻形式の多様化についての実際の考えについて詳細をご教示願えないかと考えております。

インタビューによって得られた個人情報は目的外には使用することなく、また、私の論文以外に使用することはございませんので、ご理解の程お願い致します。

敬具

私は、個人情報が一切公開されず、学問的研究のためにのみ使用されるという条件で、薛穎がインタビューを録音し、薛穎がそのデータを使い発表することを許可します。

名前()
今日の日付()

3.2 インタビューの説明

大学女性教員の婚姻形式の多様化の原因を明らかにするために、本調査では、二人の大学女性教員を対象としてインタビューを実施した。インタビューによって得られた個人情報は一切公開されず、学問的研究のためにのみ使用されることについて、インタビュー対象の許可をもらった。インタビューの内容、また、インタビューについての考察はインタビュー対象と筆者の個人的な意見しか代表していない。なお、インタビューのデータをわかりやすくなるために、「X」はインタビュー(1)の対象、「Y」はインタビュー(2)の対象、「Z」は筆者という記号にした。

3.3 インタビューの考察

3.3-1 大学教師になる条件は厳しくなることは教員の晩婚と非婚の一つの原因になる。

【Yの語り】

Z: (前略) この仕事をやる前にほかの仕事をやってみたいということを考えたことがありますか。

Y: やってみたい…うん…でも、あまりないですね。(中略)海外で日本語を教えたいなど思ったことはありますよね。日本の大学じゃなくで、途中、海外で三年間教えてたんですよ。やっぱり、海外で教えた経験がないと、なかなか日本で就職は難しいなので…

Z: そういう状況がありますか。

Y: そうですね。うん、少なくとも、私はA大学で非常勤にしてたんですけど、A大学はやっぱり海外で二三年以上の経験がある人が全部非常勤でも取れたんなので。なので、途中三年間ぐらい海外で教えてたんですけど。

(中略)

Z: 先生はAからBに転勤しましたよね。なぜですか。

Y: やっぱりAは非常勤だったんですよ。Aはもちろん時間もあるし、ずっと住んできたので、交流関係はあるので、もちろんAでいたんですけど、非常勤だったので、じゃあ、次にその専任にならなければならないですよ。もう全然違いますから。(中略)履歴書出来にはやっぱりあの、空白があるのは一番良くないので、できるだけ卒業して、卒業する前に専任の職を探したのです

ね。タイミングがあって、それで、ちょうどBの募集が出でくるので、だから、ほかのところ、別に特にBじゃなくて、別に全然ほかのところでも同じようなものがあれば、どこでもいいです。

(中略)

Y: (前略)やっぱり大学の中で女性教員何人までA大学では特に厳しいところはあったんですけど、っていう目標値があって、それを達成するために女性の方を劣るところでもあったので、そのへんはちょっとわからないんですけど、うんと、続けるっていう点っていうと(後略)

(中略)

Y: だけど、やっぱり同じぐらいの学歴二人とも博士をとって、高くても女のほうが非常勤とかになっちゃうと、子どもが独立したあと、もう一回専任に行くのはとてもとても難しいと思います。

(中略)

Y: へえ、その人たちもそうなんですけど、二人で同じところで就職するってそんなすぐはできないじゃないですか。そしたら、すごい高齢になるんですよ。だから、その夫婦も子どもができれば40歳以降になったんですよ。お互いに専任になって安定してからなんで、だから、もし私がやっぱ結婚したいことも欲しいですけど、ってなったら、お互いのキャリアが一段落した時になると思うんですよ、普通に。そうなるとも、すごく高齢出産になると思うんですよ。それも辛いなあ。

(中略)

Z: だから、今の心理準備は子どもを生まないって…

Y: だから、あの、向こうがA大学に就職、このままできて、私もA大学に就職できたら、そこに家があって、私の両親がいるから、子供を任せて、それが一番理想ですね。そしたら、もうちょっと早くできるかもしれない、私が休まなくていいので、だけど、そのためには、やっぱ、Aで仕事を選ばなければならないので、それ、得られるのはあと何年かかるのはやっぱわからないはずですよ。

考察

大学の教員になるために、高学歴や実習経験や海外の留学と教育経験を積む必要がある。また、穏やかな仕事を得るために、何年間の経験が積まなければならない。そうすると、育児の計画が伸ばされる状況が出て来た。今の就職競争も激しい、高学歴の人数も増えつつある厳しい状況で(注 2)、特別な経験やもっと高い学歴はないと就活できない恐れがあるので、多くの人の勉強時間、あるいは学生時代を伸ばさなければならない。従って、結婚と育児の計画が延期される。白波瀬佐和子(1999)「女性の高学歴化と少子化に関する一考察(特集:少子化社会と社会保障)」により、高学歴の女性は子供を産まないというのは、高学歴取得に伴う価値観や専門職に従事しやすいという社会経済的要因というより、高学歴取得者の結婚年齢が高いためであることがわかった。結婚年齢が高くなることに伴って、女性は高齢出産になる可能性は高くなってしまった。妊娠できない事情も出てきた。だから、DINKSになることは自分の意識じゃなく、仕方がないからだ。こうした状況にかんがみ、ある女性は一人暮らしや事実婚を選んだ。ここから見ると、大学教師になる条件は厳しくなることは教員の晩婚と非婚の一つの原因になる。

注 2: 文部科学省科学技術政策研究所(2012):「日本の大学教員の女性比率に関する分析」によると、1975年から2010年の間に日本の大学における学部卒業者および修士・博士課程修了者に占める女性比率は増加し、特に博士課程修了者の女性比率は約5倍の28.4%

になった。

3. 3-2 婚姻形式の多様化は女性の社会進出の要求だ。

【Xの語り】

Z: 自分は家庭と仕事、その関係はどう考えますか。

X: ええと、どちらかという、私は家庭主婦は絶対になりたくない。あの、やっぱり自分の仕事をちゃんとないと、多分うまく生きていけない人間なので、仕事は非常に大事に思っています。できれば、まあ、当然理想の話ですけど、仕事と家庭を両立させるというのは私の目標ですね。だから、例えば、今度彼はD市に、あるいはD市の近くに来てもらうことができれば、もう、あのそろそろ自分の家を買ったり、子供の教育を真剣に考えたりするっていう大きな目標はあります。あの、家庭のために仕事のことを辞める人ではありません、正直。

(中略)

Z: 先生は結婚する前に、自分の婚姻生活について予想がありますか。それは結婚したあとの現実と違いがありますか。

X: 特にはないと思いますね。やっぱり、ええと私は仕事と家庭を両立させていと思ってるので、たとえ高学歴があっても結婚は絶対する、以前から、好きな相手とか、適切な相手を探して結婚することは計画にもあったし、まあ、現実上そうだったので、特にズレはないですね。

Z: ええと、仕事によって婚姻や生活で問題が出てきたことがありますか。

X: ありますね。先言ったあの、両立させたいといはいますけれど、事実はちょっと、まだ、うまく両立できてない部分があります。今、主人と別居中なんで、同じ都市にはいないです。子どもはいるんだけど、ちょっと私は一人とがっかりで世話できないから、国の親の力を借りて預けているっていう現状なんですね。まあ、家族三人とは言っても、バラバラの生活はしている、まあ、今のところは仮にそうなっている、それは今、私にとっての大きい問題ですね。(後略)

(中略)

Z: 結婚形式の多様化という現象は特に大学で多いことは賛成できますか。

X: 多分高学歴に伴って、やっぱり簡単に仕事を辞めて、家庭に専業して主婦をするっていう方は少ないだろうとは言えますけど。ただ、全社会的にどのぐらいの率を占めているのかとかは調べないと言えない部分があるのですね。

【Yの語り】

Z: 就職の有利とか、ほかの点がありますか。

Y: あると思います。この研究にもちょっと関係あると思います。就職の面という、どうなんかなあ。そんなに違うのかなあ。まあ、いろんな噂が聞きますけど、みんなやっぱりたくさん受けてますから、試験を。だから、あの、子どもを産むぐらいの年齢の女性は辞める可能性があるから取られないかとか、なんか、そういういろんな噂がきますけど、噂だから、わからないし、そんなに周りの、本当に私の周りですけど、って、就職率で男性女性そんなに違うと思ったことはないです。あと、やっぱり大学の中で女性教員何人まである大学では特に厳しいところはあったんですけど、っていう目標値があって、それを達成するために女性の方を劣るといところでもあったので、そのへんはちょっとわからないんですけど、うんと、続けるっていう点っていう、例えば、やっぱり研究職で就職する人で大学生活は長いじゃないですか。やっぱり出会うのは大学じゃないですか。同じ大学生同士と結婚するっていうことは多いですけど、ってなると、やっぱりどっちかが必ず諦めなきゃいけないんですよね、キャリアを。つまり、男性と女性が二人とも大学で知り合ったから、二人とも研究者で結婚したとしますよね。やっぱり二人とももちろん専任になりたいから、たく

さん試験を受けるとしますよね。そしたら、今、先言ったとおり、全然違う場所に就職することになることが多いじゃないですか。全然違うところに就職して、そのまま別居で結婚していくパターンが少ないけどあるけど、ほとんどの人はどっちかが自分のキャリアを諦めて相手についていくことになると思うんですよね。そうすると、だいたい諦めるのが女性の方っていうパターンがしか見たことはないって、その生活っていう面で言うと二人とも研究者の時に、なんとなくどうしても女性が諦めるっていうことが多い、それで、もちろん、子どもを産む時には休まなければならないとか、そういうこともあるし。

Z: そうですね。あの、一般的には女性っていうことですよね。

Y: 私の周りには全部そうですね。やっぱり大学生同士のカップルとても多いけど、付いていくのはだいたい女性です。

Z: つまり、大学での仕事で、その量はだいたい女性と男性は同じですけど、生活の中で、こういう家庭のいろんな細かいことは多分女性のほうが結果として、もっと多く担当していますよね。

Y: だけど、やっぱり同じぐらいの学歴二人とも博士をとって、高くても女のほうが非常勤とかになっちゃうと、子どもが独立したあと、もう一回専任に行くのはとてもとても難しいと思います。

(中略)

Z: じゃ、先生はどういうつもりですか。

Y: へえ、その人たちもそうなんですけど、二人で同じところで就職するってそんなすぐはできないじゃないですか。そしたら、すごい高齢になるんですよ。だから、その夫婦も子どもができれば40歳以降になったんですよ。お互いに専任になって安定してからなんで、だから、もし私がやっぱ結婚したいことも欲しいですけど、ってなったら、お互いのキャリアが一段落した時になると思うんですよね、普通に。そうなるとも、すごく高齢出産になると思うんですよ。それも辛いなあ。

Z: ええと、つまり、仕事が穏やかになったあと…

Y: 穏やかっていうが、もう徹底としなくてもいいなあとわかったとき、もうここで当分やってそうだなあっていう仕事になったとき、それは大分、やっぱりある程度年が当たって、身体が子供を産む業績もできた身体だと思って…

Z: 今、自分の婚姻生活について、どういうつもりですか。

Y: (前略) やっぱ任期がN年なんですよね。って、やっぱすごく不安定で、一応、やっぱ先の話みたいに、二人とも落ち着いたら結婚したいっていう話をしてるけど、今、一回話し合ったときに目標としてるのは40歳までにそういうすごい展転としなきゃいけないそういう任期付きじゃなくて、ちゃんと二人とも仕事を得たら、結婚する予定ですよ。うん、目標かなあ。

Z: 目標ですけど、今の現実から見れば、ちょっと難しいですよ。

Y: うん、難しくなるかもしれないし、もしかしたら、どっちが就職するのは諦めて、どっちかがそれこそ辞めるっていう可能性がある…

Z: もし、一人はどうしても仕事をやめなければならない状況が出てきたら、先生は辞める可能性がありますか。

Y: そしたら、別居はいいんじゃないですか。勉強も結婚もできて…多分子どもは持ってないと思うんで、別居で結婚してる先生たちもたくさんいるけれども、別々に暮らして、あんまり子どもを持つてる人を見たことはないの、そうなったら、結婚はできるけど、子供は持ってないのかなあ、一般的に。

Z: ええと自分は子供を作りたい気持ちですよ。

Y: うん、そうです。

Z: もし、将来はこういう可能性があったら…

Y: でもね。やっぱり高齢っていうのは大変だと思うので、

Z: もしできなければ、DINKSになる可能性があるということですか。

Y: うん、あると思います。すごくあると思います。

Z: 実は、私は日本に来てから、本当にびっくりしました。女性は 30 歳以降結婚することや、30 歳 - 40 歳の段階で子供を産むのはみんなにとって普通のことみたいですよ。

Y: 大学の中では普通ですけど、一般的にそこまでには普通かって言われたら、そんなに普通じゃないです。

Z: そうですね。一般的にはそうじゃないですけど、大学ではこれは本当によく見られますよね。

Y: そうですね。でも別にいいじゃ。別にみんなは 40 歳になってから産みたいわけじゃなくて、やっぱり状況的にそうならざると得なかった人はほとんどいるんですけど。

Z: だから、先生はそういうことが受け入れますよね。

Y: 本当にいやですけどね。やっぱ 40 歳になってから、ちょっときついなあって思って…

(中略)

Z: だから、今の心理準備は子どもを生まないって…

Y: だから、あの、向こうが A 大学に就職、このままできて、私も A 大学に就職できたら、そこに家があって、私の両親がいるから、子供を任せて、それが一番理想ですね。そしたら、もうちょっと早くできるかもしれない、私が休まなくていいので、だけど、そのためには、やっぱ、A で仕事を選ばなければならないので、それ、得られるのはあと何年かかるのはやっぱわからないはずですよ。

(中略)

Z: この仕事で、受動的なことが男性より女性の方が多ですか。

Y: この仕事の人ならそういうわけじゃないと思うんですけど。一人一人違うんですけども。冷静に考えたときにどっちがキャリアに積みやすいかと、やっぱり男性の方が積みやすいと思うですよ。でも、女性でもホントは積めると思うんですけど、確かに周りのカップとは見てたら、男性はそもそも辞めてついて行く選択肢を思い付かないみたいなんですよ。だから、二人とも続けて別々に住むか。でもその時に、男性は寂しい寂しいというみたいなんですよ。でも、辞めてこっちについてくる選択肢はない、二人とも仕事を続けて、別々に住むか、向こうが辞めて付いていくかっていう二つしか見えないみたいで。だから、そもそも自分がやめって一緒にいたいって言うには、私の周りげ見る限りは、頭から最初からそんな考え一つも持ってないみたいなので、だから決定しなきゃならないのはいつもなんか、女の方はこのまま別々で行くか、辞めてついて行くかっていうチョイスを考えなきゃいけないを、こっちの方で。相手はそんなことを選ぶ？ 選ぶ？ そんなことがあるの。元々このことを考えたことはないですよ。だから、なんだ、私の友たちは「さびしいよ、寂しいよ。」って向こうが言ってるのは＝「来て」か。自分は女性のところに行く選択肢は全然ないってことです。

Z: それで、女性は相手が来るかということ省略して、意識的に別居か自分が辞めるかという選択肢から選びますよね。(うん)

Z: それで、結婚形式の多様化についてどう思いますか。

Y: ええと、多分ある意味で、これは女性にとっていいことかもしれません。仕事を積みやすいと思います。

考察

もともと女性の意識で自分の仕事は主人の仕事とズレがあったら、自分は仕事を辞めて主人に付いていくことは普通である。こういうことがあるとき、男性は自分の仕事を辞めて相手についていくことは全然考えたことはない。それに、このようなことはみんなに認められないかもしれない。しかし、現在、女性の社会進出の意識が高くなることに伴って、多くの女性は自分の仕事を続けるために、様々な婚姻形式を選んだ。2012 年内閣府の「男女共同参画社会に関する世論

調査2 ―調査結果の概要2―では「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、全体では賛成が41.3%、反対が55.1%、性別では賛成の割合は男性で、反対の割合は女性で、それぞれ高くなっていることによると、今の女性たちは専業主婦の意識を打ち破り、独立や自分のキャリアを追求する思いも強くなったことがわかった。または、内閣官房・内閣府（2013）は「我が国の女性の活躍推進に向けて（平成25年5月19日「若者・女性活躍推進フォーラム」提言より）」で少子化と生産年齢人口の減少が進む中で、女性の活躍の推進は喫緊の課題と提言された。この点から見れば、女性の社会進出を推進することは非常に重要であり、女性自身の独立や社会進出などにとって、婚姻形式の多様化はメリットもある。

3.3-3 任期付きの制度は女性の結婚や育児の計画を妨げる。

【Xの語り】

Z: 結婚したとき、仕事と婚姻の衝突や矛盾とか、悩んでいたことがありますか。

X: (前略) ええと、C市の仕事は任期が付いてたんですね。任期付きの仕事で、途中で、多分任期が外れる、つまり、私は永久雇用になるかもしれないという話、割とかなり確実な感じになって、(中略)私は永久雇用になれば、すごく安定した大学の職になるから、まあ、彼もそのところで仕事が見つかれば、ずっと二人で一緒にいられるし、将来のその家庭づくり、いろんなことも考えられて来るっていう話で、来てもらったんです。(中略)ただ、一年後、子どもを生まれだし、もうずっと一緒にいる段階で、その任期が外れないという結果になってしまったんです。それはなぜかという、あのう、人事の変動があって、私が所属していた学部が一番上の、トップ、学部長が変わったんですよ。変わったら、いろんな方針とか、この学部がどうやって運営しているのかっていうことも大きな変化があったのですから。(中略) その一年、二年はすごく大変、辛かったの。でも、まあ、いきなり任期がもう永久にならない、続かないということに言われても、いきなりだから、どうしようもなかったんですね。それで、仕方なく、ええと、とりあえず、その契約は一年間だけ終わらずっていう契約をしてもらって、とりあえず、授業を持ってたんですね。ただ、授業を持つ分だけ給料をもらうみたいの感じですよ。そうすると、その一年間の間に、私がどうか仕事を探さないといけなくなった。(中略)仕方なくいろんな大学に履歴を送って、応募してたんですね。その時にK大学が決まったわけです。それでも任期がついてるでしょう。でも、仕方ないから、非常勤よりは、絶対K大学の方がいいと、つまり、将来的な、まあ、キャリアに関しても、K大学のほうがいいと判断して、(中略)本来は5年間ですね。やっぱり任期があるものなので、将来的にどうなるか、誰も保証してくれない話なので、あと、私は前の人気道路ちょっとトラウマになったよね、怖い。だから、人気があるということは絶対不安定だから。まあ、今回こそ、絶対にも任期のない、永久ポストに応募しようと思って、いろいろ動いて、今度は決まったんですね。(中略)もちろん、将来的にふたりが一緒にいるということはもう大前提だから、そういう方向に向かって、今努力はしているところです。

(中略)

Z: 結婚することは女性教員にとってどんな影響がありますか。例えば、時間が少なくなると、仕事がうまくできなくなるということとか…

X: 結婚する自体は仕事に特に影響はないと思います。ただ、もちろん、その仕事の形式によりますが、例えば、正式なパーマネントの仕事ですと、まったく全然関係ないと言ってもいいと思いますね。というのは、例えば、あの、妊娠が来て、子どもができたとしても賛否とかはあるから、まあ、それはそれで休みを取って、育児などをして、また、休みが終わった段階で、仕事復帰できればいいし、ただ、あの、仕事の形式は、例えば、任期付きだったり、契約のそういう感じだっ

たり、それはやっぱり影響はあると思います。自由に簡単に妊娠して、子供を産もうとおもっても、なかなか仕事上で許さないとか、ええと、できない状況もあるので、だから、あくまでも仕事の形式ですね。

【Yの語り】

Z: (自分にとって教師の仕事は)欠点がありますか。

Y: (前略)たくさんの方はもう本当に日本のいろんな場所の大学を受けているし、私もきっとこれからそうなると思って、特に最終的に住むことになるかわかりにくいという問題ですね。

Z: (前略)日本の大学の先生は任期がありますよね。これについて、先生はどう思いますか、自分にとっていい点、または悪い点がありますか。

Y: そうですよ、私にとって、私個人的にとって、やっぱり悪い点しかないです。もちろん、あの、例えば、そのいろんな大学に行けるというメリット…まあ、それは別に任期が付いてなくてもいいんじゃないですか。別に違い大学に行きたいと思ったら、好きに試験を受けられるので、別に任期が付いていなくてもいくらでも大学が変えることが出来ると思うんですよ。だから、別にそれもメリットじゃないです。やっぱ悪いことしかないし…将来、また試験を受けて、違うところどこに行くかわからないし。そう考えると、やっぱり何処に住むかわからないし、仕事を続けるかもわからないってなると、なかなか基盤がない気持ち…

(中略)

Z: じゃ、先生はどういうつもりですか。

Y: へえ、その人たちもそうなんですけど、二人で同じところで就職するってそんなすぐはできないじゃないですか。そしたら、すごい高齢になるんですよ。だから、その夫婦も子どもができたら40歳以降になったんですよ。お互いに専任になって安定してからなんで、だから、もし私がやっぱ結婚したいことも欲しいですけど、ってなったら、お互いのキャリアが一段落した時になると思うんですよ、普通に。そうなるとも、すごく高齢出産になると思うんですよ。それも辛いなあ。

(中略)

Z: 今、自分の婚姻生活について、どういうつもりですか。

Y: (前略) やっぱり任期が二年なんですよ。って、やっぱすごく不安定で、一応、やっぱ先の話みたい、二人とも落ち着いたら結婚したいっていう話をしてるけど、今、一回話し合ったときに目標としてるのは40歳までにそういうすごい展転としなきゃいけないそういう任期付きじゃなくて、ちゃんと二人とも仕事を得たら、結婚する予定ですよ。うん、目標かなあ。

(中略)

Z: もし、一人はどうしても仕事をやめなければならない状況が出てきたら、先生は辞める可能性がありますか。

Y: そしたら、別居はいいんじゃないですか。勉強も結婚もできて…多分子どもは持ってないと思うんで、別居で結婚してる先生たちもたくさんいるけれども、別々に暮らして、あんまり子どもを持つて人を見たことはないの、そうなったら、結婚はできるけど、子供は持ってないのかなあ、一般的に。

Z: ええと自分は子供を作りたい気持ちですよ。

Y: うん、そうです。

Z: もし、将来はこういう可能性があったら…

Y: でもね。やっぱり高齢っていうのは大変だと思うので、

Z: もしできなければ、DINKSになる可能性があるということですか。

Y: うん、あると思います。すごくあると思います。

Z: 実は、私は日本に来てから、本当にびっくりしました。女性は30歳以降結婚することや、30歳-40歳の段階で子供を産むのはみんなにとって普通のことみたいですよ。

Y: 大学の中では普通ですけど、一般的にそこまでは普通かって言われたら、そんなに普通じゃないです。

Z: そうですね。一般的にはそうじゃないですけど、大学ではこれは本当によく見られますよね。

Y: そうですね。でも別にいいじゃ。別にみんなは 40 歳になってから産みたいわけじゃなくて、やっぱり状況的にそうならざると得なかった人はほとんどいるんですけど。

Z: だから、先生はそういうことが受け入れますよね。

Y: 本当にいやですけどね。やっぱ 40 歳になってから、ちょっときついなあって思って…

Z: もし子どもができたら、どういう予想がありますか。

Y: ええ、でも、もう、もう手遅れですよ。ええと…

Z: だから、今の心理準備は子どもを生まないって…

Y: だから、あの、向こうがA大学に就職、このままできて、私もA大学に就職できれば、そこに家があって、私の両親がいるから、子供を任せて、それが一番理想ですね。そしたら、もうちょっと早くできるかもしれない、私が休まなくていいので、だけど、そのためには、やっぱ、Aで仕事を選べなければならぬので、それ、得られるのはあと何年かかるのはやっぱわからないはずですよ。

考察:

データ1の対象のように、永久雇用になると将来の家庭づくりなどが考えられると思ったけど、学校の方針による変化は予測できなかったの、受動的な立場に至ってしまった。さらに自分の人生の計画とご主人の仕事や自分の家庭の計画などは全部変えなければならない。ご主人と別居で、子どもは中国で両親の所にいる状況はやむを得ないと言える。今、永久雇用の仕事を探したので、仕事の都市に家を買って、主人もその都市に転勤することやいろいろなことを着手できるようになった。データ2の対象は結婚してなく、仕事もすごく不安定なので、結婚のことはずっと延期されている感じである。それに、任期がある仕事は正式の仕事とは言えない感じがある。任期付きの仕事の場所は変わりやすいので、最終的に住むところはわからない。だから、仕事は安定したあと結婚するつもりです。今、結婚相手と別居中なので、子どもを作るつもりは全然ない。しかし、任期付きの仕事はいつ終わるかわからないので、結婚のことは明確な予定を立てられない。二人のインタビュー対象は仕事の安定を結婚とか子供を作ることの大前提として努力しており、穏やかな仕事は安定の給料を確保でき、長期的な生活を保障できると思う。任期付きの仕事のせいで婚期を逸することや別居の婚姻などをよく見える。さらには女性の年齢が高くなると、高齢出産や妊娠できないことも避けられない。従って、DINKSになることはやむを得ないと思われる。つまり、任期付きの制度は女性教員の結婚や育児の計画を妨げるから、女性教員の婚姻形式の多様化の一つの原因とは言えるのではないだろうか。

文部科学省大学教員の任期制によると、教員の流動性向上による教育研究の活性化と多様な経験を通じた若手教員の育成するために、大学に任期制を導入した。確かに日本の教育発展と学校の人材交流の面で、任期制は非常に有効であるが、この効果は教員の個人利益を損なうことを前提として得られたのではないだろうか。学校は完全な主導権を握る反面、教員は完全に受身の立場に至ってしまった。任期制は教員、特に女性教員の個人生活にマイナス影響を与えることは事実である。それに、任期制は長期的な研究を続けられない欠点もあり、任期期限が来る前に進路をずっと心配する教員は研究や教育に全力を出すことはできない恐れもある。さらに、任期制は教員の個人利益を損ないすぎると、教員の反抗心を生まれ出す可能性もある。こういう点から見れば、学校は任期制を使わず、自身の状況と教員の個人利益に基づいてウィン・ウィンの制度を打ち出したほうがいいのではないだろうか。

4. 結論

以上、本稿は大学女性教員の婚姻形式の多様化の現象に基づき、二人の大学女性教員へのインタビューを通して、大学女性教員の婚姻形式の多様化の原因を考察した。

まずは、大学教師になる条件は厳しくなることは教員の晩婚と非婚の一つの原因になるという点である。大学の教員になるために、高学歴や実習経験や海外の留学と教育経験を積む必要がある。即ち、勉強時間、あるいは学生時代を伸ばさなければならない。従って、結婚の計画が延期され、さまざまな婚姻形式が出た。これは今の激しい就職競争や高学歴の人数の増加に関係している。

次は、婚姻形式の多様化は女性の社会進出の要求だという点である。今の女性教員たちは専業主婦の意識を打ち破り、独立や自分のキャリアを追求する思いも強くなった。女性の社会進出の意識が高くなることに伴って、多くの女性は自分の仕事をし続けるために、様々な婚姻形式を選んだ。この面で、婚姻形式の多様化は女性の活躍推進にも積極的な影響があることが考えられる。

最後に、任期制は女性教員の結婚や育児の計画を妨げるという点である。これは女性教員の婚姻形式の多様化のもっとも重要な原因だと思う。多くの人は仕事の安定を結婚や子供を産むことの大前提として努力している。穏やかな仕事は安定の給料を確保でき、長期的な生活を保障できる。任期付きの形式で就職したら、すごく不安定で、結婚のことは明確な予定に立たれない。このような任期付きの仕事のせいで婚期を逸することや別居の婚姻などをよく見える。さらには女性の年齢が高くなると、高齢出産や妊娠できないことも避けられない。従って、DINKSになることはやむを得ないと思われる。これは任期制が大学教員の個人利益をおろそかにしたと思う。

以上の結論は日本の大学女性教員の婚姻形式の多様化には日本の激しい就職競争、女性の社会進出の意識が強くなる状況、または大学任期制の欠点などを反映されていることを示唆している。大学の任期性は教員の個人利益のための面ですらに改善する必要があると思う。また、多様な婚姻形式は女性教員が自発的に選ぶのだけではなく、社会的な問題と女性たちの意識の変化を考え、現実の必要に適切に対応する対策だ。本稿により得られた知見は、女性教員の働き環境の改善と少子化の原因を明らかにすることに寄与すると思われる。女性の活躍推進の面にも応用可能である。

しかし、本稿の分析対象はただ二人しかないから、全日本の状況を表せない。しかも、大学任期制についての改善方法なども提案できなかった。今後、全日本の大学女性教員の婚姻形式についての調査とほかの原因を明らかにする必要がある。または、任期制についての意見と改善方法の検討も必要である。この点については今後の課題としたい。

5. 参考文献

- 1、井上輝子(2011)『新・女性学への招待—変わる/変わらない 女の一生—』有斐閣選書
- 2、文部科学省 大学教員の任期制。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/attach/1315829.htm (2013年6月20日にアクセスした)
- 3、文部科学省科学技術政策研究所 (2012): 「日本の大学教員の女性比率に関する分析」
- 4、文部科学省: 教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則 (教員免許課程認定関係条文抜粋) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1268593.htm (2013年7月29日にアクセスした)
- 5、内閣官房・内閣府 (2013) 「我が国の女性の活躍推進に向けて (平成25年5月19日「若

者・女性活躍推進フォーラム」提言より)」

6、内閣府：「男女共同参画社会に関する世論調査2 ー調査結果の概要2 」(2012)

<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-danjo/2-2.html> (2013年7月29日にアクセスした)

7、白波瀬佐和子(1999)「女性の高学歴化と少子化に関する一考察(特集:少子化社会と社会保障)」

8、質的研究におけるインタビューについて

<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/interview.html> (2014年4月25日アクセスした。)

9、総務省統計局ホームページ/20~44歳の年齢別未婚率の推移(1950年~2005年)女性

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kouhou/useful/u38.htm> (2013年4月29日にアクセスした)